



日本近現代史における、水路業務（海図・海の測量）を研究

文学部 史学科 准教授 小林 瑞穂
 こばやし みづほ

太平洋戦争と日本海軍水路部の関わりに注目

コメントできる
研究領域

海図・海の測量

日本海軍水路部

京都女子大学は、教員の研究活動や社会連携など“社会のための女子大学”の姿をお伝えするニュースレターを発信しています。今回は、日本近現代史における「水路業務の歴史」を研究する、史学科の小林瑞穂准教授をご紹介します。

■日本における数少ない「海図」と測量に関する歴史学の研究者。近現代の水路業務の歴史研究。

海図とは、船舶の運航に必要な航路の状況（沿岸地形、水深、底質、危険物、灯台など）の情報を表示した「海の地図」で、国際条約および国内法令では船舶は必要な海図を整備し、備えるように定めています。

小林准教授は、明治初期から戦後に至るまでの日本における水路業務の歴史（海図の作製・海の測量）を専門とする海図と測量に関する歴史研究の第一人者です。海上保安庁と協力して研究を進めています。

明治初年に始まった日本の海図作製は、海軍水路部によって進められました。戦後、海軍が解体された後は海上保安庁にその機能を移し、現在は海洋情報部として測量や海図の作製を続けています。

■海の測量を重視した米英に比べて、水路業務を重視しないまま太平洋戦争に突入した日本海軍。

太平洋戦争時の水路部の史料は、様々な事情によりあまり残されていません。『戦間期における日本海軍水路部の研究』の著書がある小林准教授によると、太平洋戦争以前の日本海軍では軍艦や航空機の建造と製造を重視しており、海の測量や海図の作製はさほど重要視されていたとはいえず、日米開戦に備えて急遽水路部の人員と規模を拡大したという実態がありました。そのため、日本海軍は海図の準備と供給が十分とは言えない状態で太平洋戦争に突入せざるを得ませんでした。一方で、イギリスやアメリカは長年にわたって海の測量を積み重ねており、平時から海の基本情報の収集に力を入れていました。

水路部は昭和初期には航空図の作製や気象観測まで担い、日本海軍を支えていました。太平洋戦争中には、東南アジアに出先機関を設置したり、昭和17年には船上で急遽アツ島とキスカ島の仮製海図を作成し、洋上でキスカ島に向かう駆逐艦に渡したという証言があります。

■太平洋戦争中の日本海軍水路部に関する史料。測量時に戦闘に巻き込まれた人々の記録も。

小林准教授は海上保安庁の史料調査の際に太平洋戦争時の雑誌に掲載された「決戦下の水路部座談会」の記録を発見しました。そこには水路部に所属していた海軍少佐の「アメリカの飛行機の銃撃を受けて戦死した者もあり、測量点を廃棄しなければならないような被害を受けたこともある。測量隊には十分な兵器も防護もなく第一線に飛び込んでいる」といった発言があり、戦争中に海図を作るため東南アジアをはじめとした戦地に派遣され、亡くなったり、測量のために戦地を転々とした人がいたこともあります。

小林瑞穂（こばやし・みづほ） Profile

<https://gyouseki-db.kyoto-wu.ac.jp/kyuuhp/KgApp/k03/resid/S001757>

略歴 1978年生まれ。2001年京都女子大学文学部史学科卒業、2013年明治大学大学院文学研究科史学専攻 博士後期課程 修了。明治大学文学部専任助手、明治大学文学部兼任講師を経て、2019年より現職。

論文 「シベリア出兵の開始と海軍水路部による間宮海峡・黒竜江口測量」（単著/2024年/『史窗』(81), 1-12頁）
 「日本海軍水路部と『陸中国釜石港之図』」（単著/2023年/『かまいしの鐵學』(2), 8-13頁）
 「日本海軍の北樺太油田獲得と水路部」（単著/2021年/『史窗』(78), 1-24頁）

著書 『日本水路史百五十年 1871-2021 HYDROGRAPHY IN JAPAN』（監修/2022年/一般財団法人日本水路協会 120-192頁）
 『戦間期における日本海軍水路部の研究』（単著/2015年/校倉書房）

<本件に関する報道関係者の皆様からのお問合せ先>

- ・京都女子大学入試広報課 岡橋・竹繩 TEL : 075-531-7054 FAX : 075-531-7222
- ・京都女子大学広報デスク（ブランディング・ポート内）福嶋・井上 TEL : 06-4391-7156 FAX : 06-4393-8216
- ・京都女子大学HP <https://www.kyoto-wu.ac.jp>